

文学的文章を自ら読み深め、解釈したり評価したりする力を育成する高等学校国語科指導の在り方
—生徒の「読む視点」が広がる単元構想の工夫を通して—

福島県立会津第二高等学校 教諭 若菜 睦

1 研究の趣旨

学習指導要領の新設必修科目「言語文化」では、「読むこと」の目標として、「作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること」や「文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること」が挙げられている。作品の内容の把握だけでなく、それを踏まえて、作品の意味を考えたり作品の価値を判断したりするような解釈や評価をする力が求められているのである。

これまでの自身の授業を振り返ると、作品に対する考えを記述するような課題を生徒に課したこともあったが、「何をどう書いてよいか分からない」「特に感想がない」という生徒の姿があった。そこで、生徒が自ら作品を読み深め、解釈や評価をする力を高めていくためには、作品を読む際に「読む視点（作品を読み深めるきっかけとなる着眼点や観点）」をもたせることが有効なのではないかと考えた。本研究では、「作品レビュー（叙述を根拠として作品の意味や価値についての自分の考えを書いたもの）」を作成する言語活動を設けた。生徒がその過程でより多くの「読む視点」から作品を読むことができるようになれば、解釈したり評価したりする力が高まるのではないかと考え、以下の仮説を設定した。

高等学校国語科「読むこと」の指導において、以下の手立てを講じれば、文学的文章を自ら読み深め、解釈したり評価したりする力が育成されるであろう。

【手立て1】「読む視点」を意識して読ませる工夫

【手立て2】解釈や評価をつくりあげるための交流活動

【手立て3】「読む視点」を用いて読み深める力を高めるための振り返り

2 研究の概要

(1) 【手立て1】「読む視点」を意識して読ませる工夫

「作品レビュー」を書く前段階として「準備メモ」の作成を行った。その際、クラスで複数の「読む視点」を共有し、その「読む視点」ごとに問いを設定させ、叙述から答えを考えさせるようにした。問いに対する考えはクラウドで共有し、それを元に「準備メモ」への記述ができるようにした。

(2) 【手立て2】解釈や評価をつくりあげるための交流活動

作品全体の読みに関わるような共通課題を設定し、課題に対する考えを話し合う交流活動を設定した。生徒達は本文の叙述や「準備メモ」の記述を確認しながら話し合うことができた。その後、自身の考える作品の意味や価値を「作品レビュー」に記述した。

(3) 【手立て3】「読む視点」を用いて読み深める力を高めるための振り返り

記述した「準備メモ」と「作品レビュー」を振り返り、自身が用いた「読む視点」が作品の意味を考えたり価値を判断したりする上でどのように役立ったのかを考えさせる時間を設けた。これにより、生徒が学んだ「読む視点」を他作品にも生かせるようにした。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

事前・事後課題を行い、全体の変容と個の変容を分析した。すると、仮説の手立ては生徒に「読む視点」をもたせ、解釈や評価をする力を高めることができたことが明らかになった。「読む視点」に関係する問いを自分で設定することで、問いの答えを追究しようと叙述を丁寧に読むようになり、叙述から気付きを得て、作品の意味を自分なりに考えたり作品の価値を判断したりできるようになるのではないかと考えられる。

(2) 今後の課題

活動に対する目的意識をもたせることが、今後の課題である。作品を介したコミュニケーションの面白さを実感させるなどしていきたい。また、自ら「読む視点」を用いて読み深めるためには問いの設定が重要であると分かったため、今後は自ら問いを設定する力を育成するための手立ても考えていきたい。